

「紙すき」活動の教材化

○ 芹沢 澄子 (銀鏡幼稚園)

野田 志摩子 (銀鏡幼稚園)

I はじめに

今年度(平成2年度)の造形活動の教材として、園では、紙製牛乳パックを再利用する「紙すき」を取り上げた。完成した子どもたちの作品に接した母親たちも、成人学級の牛乳パック再利用に取り組んだ。伝えられるところによればアメリカでは、小中、高生らの草の根運動が効果を奏し、紙製パック入りの牛乳が減り、ガラスビン又はプラスチック製容器が登場しつつある。又、神奈川県下の大和市などでは、市民から牛乳パックを回収しはじめ、再利用して森林保護へつながる運動が活発化し始めていることが報道されている。以上の如く、地球資源としての木材をリサイクルして、より有効な利用法を考える運動は、日本のみならず、世界的傾向はいえる。その意味で地球環境保護に通じる「紙すき」活動は、単に造形教材としての視点だけではなく、子どもたちも親も、地球規模での環境教育のための親子教材としても着目し、その実践を報告し、発表したい。

II 研究内容

1. 牛乳パックから「紙すき」活動の概要

① 教材・道具類

牛乳パック・かみさき・ミキサー・のり・スポンジ・トレー(又はバット)・ボール・さらし・新聞紙(又は包装紙)・アイロン・はかり

② 紙すきの工程

- ① 牛乳パックを切り開き2〜3日水につける。
- ② 牛乳パックのポリエチレン(つるつる)をはがす。
- ③ はがしたバルブをできるだけ細かくちぎって水につける。
- ④ しんなりしたバルブに水七分量程加え、約2分間ミキサーにかける。
- ⑤ 隔板したドロドロの液を、水を切りながらだんごにする。(だんご1ヶ140g)
- ⑥ おたんご1ヶに水50ccと小豆大ののりを加え、もう1度ミキサーにかける。
- ⑦ すき台と棒を水でよくぬらしてトレーに入れる。
- ⑧ ⑥の液状を棒の中へできるだけ平らになるように流し込む。(図-1) (写真1)

- ⑨ すき込むもの(折り紙や毛糸で模様づくりをする)をのせる。

- ⑩ ⑨の上に2倍にうすめた液をゆっくり全体にかけていく。(図-2)

- ⑪ 棒をはがす。(図-3)

- ⑫ すき台を逆さにして平らな所に用意したさらしの上にのせる。ゆっくり押しつけながらうすいた水を入ポンジでとる。(図-4)

- ⑬ すき台をもち上げ、さらしをつけたまま新聞紙にうつしかえ、さらしをゆっくりはがし乾燥させる。(図-5)

- ⑭ 「紙すき」のでき上り。

③ 実践内容

この活動に入る前に子どもたちと、今ゴジを育てる場所がなくてこまっていること、不要になった牛乳パックを活用したら何が出来るか話し合ってから「紙すき」活動へ導入する。

家庭からもらった牛乳パックを切り開き、両面のポリエチレンをはがし、バルブをミキサーにかけて再生開始。毛糸や折り紙で模様づくりをする。バルブとはひとりひとり行いミキサーにかけていく。活動が進む時は、グループ単位で行う。作業が進むにつれ、今までの牛乳

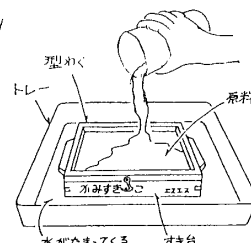
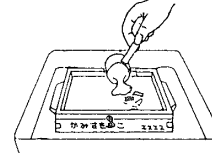
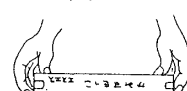


図-1



(ちり紙や押し花や木の葉の上へ2倍にうすめた紙の原料をのける)
※ 生のままの木の葉はうまく出来ません

図-2



布またはフェルト 木板または平板など

図-3

アミの上ににじみ出た水とスポンジで吸いとる

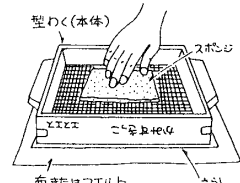


図-4

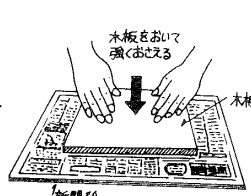
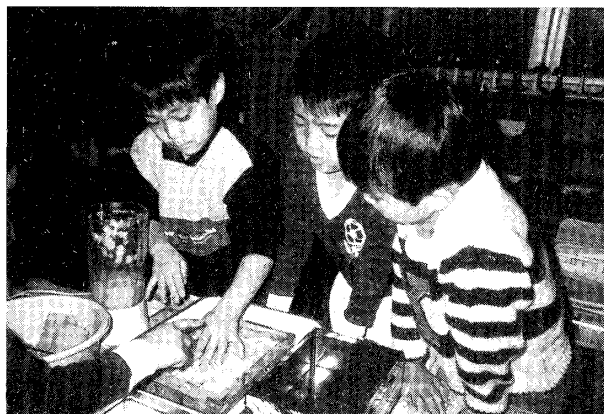


図-5

パックがパルプに変る。そしてミキサーにかけて更にドロドロの液のおまじり。1つ1つの工程で変化していくことに気づいたと矢におどろきを知り関心が強まる。

〈写真1〉 枠の中に入れた液状を平らにしている



Ⅲ. 考 察

1. 作品を通して

子どもたちは、牛乳パックから、「紙」が出来上がったことに興味、関心を示し、喜びを表わす。パルプから紙が出来上がる過程を、自分たちが好きな紙製品をつくる中で実際に体験した。母親達は、色彩や全体のバランスを考え、模様がくりにも真剣な表情で取り組み、個性的で素敵な手づくりハガキをつくり上げた。子どもたちと同じ体験を通し、楽しさを知り、「紙すき」への関心を強く示した。

2. 作る過程を通して

牛乳パックを切り開き、両面のポリエチレンがしめあるのがうまくいかず、部屋をびしょびしょにしはがらパルプとりに一生懸命であった子どもたち、水もつめたく「つめたいね」「なかなかとれない」「あ！とれた」「みて！きれいでしょう」「これがハガキになるのかな」などと子どもたちは作業に取り組む中で、さまざまな会話を交していた。又、母親たちは、「どちらが上手に出来たかしら」「こんな大変なことを子どもたちが活動していたのね」と感想をもらす。

3. 作品への寄せ書き

子どもたちは、自分の作り上げた「紙すき」はがきを、造形の日に展示し、両親や他の友だちに見てもらったことに喜びを知った。そして家庭にもち帰ったあとは、額に入れてもらい部屋の飾り

として活用したり、机の中にしまって大切にしている。玄関に飾った子は、訪問した人から「素敵なものね」といわれ、うれしそうにしていた。親たちは、私製ハガキとして祖父母へ手紙をかくほど実際に使われた。又、体験して1か月後の親からは、「牛乳パックからこんな素敵なものができるなんて」とおどろきの声。そして、近所の人から「私達にもおしえてほしい」という声ももちあがり、指導に当たっている。（写真2）

〈写真2〉 成人層にもよって「どちらが上手にできたかしら」



Ⅳ. おわりに

(1)手順をふんで時間をかけて牛乳パックの再生品から莫大にパルプ、そこに個性ある葉書きなどの2次製品が出来たことへの手作りの喜びと満足感は親子共々大きい。

(2)「こんなものまでしていたのか」「もっといいない」など森林資源をまだにしていたら環境問題は、増々悪化してしまうことを知った。そんな中でアメリカの紙製牛乳パックをガラスビンやプラスチックに変える運動、そして、日本でも市民の声を紙すき運動はとくに国の内外と動行と運動している喜びを親子で体験できた。

(3)牛乳パックを資源として再利用し「紙すき」の造形活動の喜びは大きく、造形の日や成人学級の活動にとびめてあかず、卒園クラスは、牛乳パックから再生紙で「状差し」をつくり、卒園記念品とすることを決め、寒中にその製作に熱中している。

(4) (1) (2) (3)は、材料から作品まで工夫して個性豊かな造形活動ができたこと、その活動が環境保護という世界的命題に対して深く直接かかわった事実を示すもので「紙すき」が造形教材として、同時に環境教育のわかりやすい事例として認められる。

火 上